

別)を意味しているといわれています。

その後は、十一代顕如門主の時に、七条袈裟が採用され、江戸〜明治時代には衣と袈裟の徹底した階層化・差別化が図られます。

一九二二年、水平社運動に呼応する形で黒衣同盟が結成され、色衣や七条袈裟が問題にされます。その後、後紆余曲折しますが、現在まで教団内の差別構造は問いきれていない感があります。西教寺としても今まで問題にすることができませんでした。今回ささやかながら(墨袈裟とまではいきませんが)、真宗の本来化に向けて一歩を踏み出してみたというわけです。



参詣者に配布した記念誌

ビルマの堅琴は音もなく

—ミャンマーのバゴダ巡り④ 斉藤 久仁子

写実的なお顔の仏様

今は少数民族としてビルマ族の中で小さく生活しているモン族のかつての栄光の都バゴーの仏塔はどんな形で残っているのだろうか。

左手木立のかなたに大きな仏像のお顔が見え隠れしてきた。バスが左折すると太い柱に背をのりつけたような像が近づいて来た。

チャイブーン・バゴダです、とのこと。これは驚きだ。バゴダと言えば広島駅裏の山上の、円錐に尖塔をつけた仏塔を想像していたのに、これは露座の大仏だ。高さ三十メートルという太い柱の四面に派手な黄金色の衣を着けた



座仏が背をびたりとつけておわす。仏様は露座なのに像の前に十メートル、屋根をつけた参道が延びている。ここで靴を脱いで下駄箱に入る。インドやスリランカで

もそうだが、東南アジアのお寺では地面のままでも参道から裸足になる。「このお寺だけ撮影が無料です。」との説明に、他の寺では有料だと悟る。露座だから有料にしたって、

域外からでも撮れるわけだ。

と、片言の日本語で、五・六歳くらいの子が塗った男児が仏像の写真を売りに近づいて来た。鼻の上は格別白く、額と右頬は渦巻き、

左頬は点々という模様の化粧だ。こんな幼児が片言の日本語を使うとは、日本からの旅行者はいいお客なのだろう。

とお姿だった。それにしても大きな像だ。修理している人が、衣の壁に隠れそうに小さく見える。ふと見ると、仏像に額づいているミャンマーの男たちが巻きスカートを巻いた背に、脱いだゴム草履を挟んでいる。こうして持っていれば屋外の仏を拝したらどこからでも出られると思つて見ているが、その後、屋内の寺でも皆背に挟んで持ち歩いていたのだ。

参道を抜けて像の前に立つ。顎の下から見上げる青空がまぶしい。一四七六年建立というが、五百数十年経つているとは思えない鮮やかな色づきだ。まっ白い肌、見開いた大きな目、くつきりと長い眉、まっ赤な唇、金色に輝く鉢巻き様のかぶりもの、右肩偏担の衣の金色の縁取りに着けたガラスモザイクの輝き、派手な上、あまりに現実的な肉体を思わせる姿は、様式化されている日本の仏像を見慣れた目にはどぎまぎさせられる。これを造らせたモン族の王様はよほど派手好き写実好きだったんだろうと思つたが、以後ミャンマーで出会うどの仏も皆こんな生々しいお顔

と今昔の感いかんともしがたい。参道を出て改めて青空に浮かぶ四体仏を見返る。まさか造つた時から露座ではなかつたろうから、この上になんか建物があつたのだろう。十八世紀半ば、ビルマ族に征服されたバゴーは今、熱帯の自然木に囲まれて、樹木が台座の階段にまで生えている。かつての王都を偲ぶすががこれか、と思つたと今昔の感いかんともしがた